

グローバルヒストリーの中の中国研究 —世界史学会（World History Association）2011年北京大会参加記—

楊 韜

はじめに

辛亥革命 100 周年にあたる今年、世界各地で関係学会やイベントが盛んに行われた。日本では、「グローバルヒストリーの中の辛亥革命」と題する国際会議も東京と神戸で開かれ、学界の注目を集めた。これらの国際会議やシンポジウムにおいては、グローバル的な視点から辛亥革命を検討し、世界的範囲で中国近代史を思考する傾向がはっきり表れている。これは、近年の歴史研究の一つの潮流と言えるだろう。

本稿は、この「グローバルヒストリー」に関わる国際会議に参加した経験及び感想についてまとめたものである。筆者は数年前に世界史学会（World History Association, 本部：米国・ハワイ大学）に入会したが、年次大会に初めて参加したのは昨年アメリカ・カリフォルニアで開催された 2010 サンディエゴ大会である。ここでは、2011 年に首都師範大学で開催された 2011 北京大会を中心に取り上げるが、昨年のサンディエゴ大会と比較した若干の感想も述べておきたい。

I 世界史学会について

まず、世界史学会について簡単に紹介しておく必要があるだろう。世界史学会は 1982 年にアメリカで創設された国際学会であり、40 か国以上に約 1500 人の正会員を擁している。現在、世界史学会の本部は米国・ハワイ大学に置かれている。アメリカ国内の 14 支部のほかに、オーストラリア・ヨーロッパ・東アジアの三つの海外支部が設けられている。世界史学会の会員には、大学などに所属する研究者のほかに、多くの中学校や高校の歴史科教員もいる。また、理事会などの学会の組織を構成する際には、研究者と（大学以外の）教員のバランスを重視しているようである。

世界史学会の機関誌である『世界史ジャーナル』（*Journal of World History*）は 1990 年に創刊され、2011 年 12 月現在は第 22 巻第 3 号までハワイ大学出版会より発行されている。また、『世界史学会会報』（*WHA Bulletin*）は 1983 年に創刊され、すべての会員へ配布されている。2003 年に、世界史学会の電子ジャーナル『世界史連結』（*World*

History Connected) が創刊され、イリノイ大学出版会より発行されている。そのほか、世界史学会は書籍賞、教員論文賞、学生論文賞を設けており、毎年優秀な研究書及び研究者に授与している。世界史学会は毎年の6月前後に年次大会が開催されるが、三年に一度はアメリカ国外で開催されるようになっている。これまで、アメリカ国外での開催地はカナダのビクトリア、モロッコのイフラン (Ifrane)、英国のロンドン、スペインのパンプローナ (Pamplona) などがある。アジアでの開催はこれまでのソウルに続き、北京が二回目である。

II 2011年北京大会について

2011年の世界史学会年次大会は、2011年7月7日から11日にかけて、北京にある首都師範大学にて開催された。同大学世界史研究センター（「全球史研究中心」）は主催組織である。世界史学会の年次大会は必ずテーマを二つ設定しており、2011年のテーマは「世界史の中の中国 (China in World History)」と「中心と周縁からみる世界史 (World History From the Center and the Periphery)」の二つである。地理的に近いということもあってか、日本からは昨年のサンディエゴ大会より多くの研究者が参加した。全参加者数は36か国から約600人に上り、118の分科会(セッション)で400以上の発表が行われた。大会の公式言語は英語と中国語だが、筆者が参加したセッション及び聴講したいくつかのセッションを含め、すべての発表と討論が英語で行われた。

大会では、二つの基調講演が行われた。まず、初日の午前、首都師範大学学長・同大学「全球史研究中心」主任の劉新成先生は、「中国のグローバルヒストリー (Global History in China)」と題する基調講演を行った。講演では、主に中国における世界史研究及び世界史教育に関する現状や展望が述べられた。二回目の基調講演は、アメリカ Grand Valley State University の Craig Benjamin 先生によるものである。講演のタイトルは「遊牧民の接近：ギリシア-バクトリアの征服—世界史における最初のイベント（‘Considerable Hordes of Nomads Were Approaching’：The Conquest of Greco-Bactria-the First ‘Event’ in World History.）」。この講演は、非常に大きなスケールで、西アジア地域における歴史的出来事を対象としている。中国語の通訳があったものの、筆者にとっては非常に難解だと感じられた。しかし専門外ながら、一つの歴史的イベントを取り上げ、その時代の世界的な背景を関連づけた報告として、非常に成功したと思われる。講演終了後、会場からも多くの質問やコメントが出て、予定された時間以上に議論が行われた。

上述したように、今大会には100以上の多彩な分科会があり、そこでの多くの発表は、政治・外交・経済・社会・文化・芸術などの様々な分野に及び、その全体像を把握することは極めて困難である。以下、筆者の関心があった（或いは聴講した）発表の中から、中国を研究対象とするいくつかの発表を選択し、その題目を示しておく。以下で挙げられた

のは、いうまでもなくほんの一部に過ぎないことを断っておく（題目の日本語訳は筆者によるものである）。

Communism across the Pacific: Chinese Leftist Sojourners in America, 1920s-40s.

(Bin YANG, National University of Singapore, Singapore)

大洋を渡った共産主義：アメリカの左派中国人滞在者，1920-1940 年代

A Chinese City between the Global and the Local: Harbin, 1898-1946.

(Mark GAMSÄ, Tel Aviv University, Israel)

グローバルとローカルのはざまにおける中国都市：ハルビン，1898-1946

Celestial Punishment in Western Eyes: Comparing Concepts of Law from Western Pictorial Reports of Chinese Judicial Processes.

(Chi-Sung CHEN, Kansai University, Japan)

西洋人の目に映る天朝処罰：西洋画報における中国の裁判を題材にした法概念の比較

The Big History of a Big Square: New Perspective on the Architecture of Tiananmen Square.

(Esther QUAEDACKERS, University of Amsterdam, Netherlands)

大広場の大歴史：天安門広場の建築学的新視点

Nationalism in Uniform: The Jacket of Sun Yatsen and Gandhi's Khadi.

(Carles BRASO BROGGI, Universitat Pompeu Fabra, Spain)

ユニホームのナショナリズム：孫文のジャケットとガンディーのカダール織り

The Origin of Classical Ballet in China through the Narrative of Cross-Cultural Influence.

(Yukiyo HOSHINO, Nagoya University, Japan)

中国におけるクラシックバレエの起源：異文化影響の言説を通して

Chinese Medicine and Transnational Views of the Nineteenth-Century Body.

(Sarah SCHRANK, California State University, Long Beach, United States)

中国薬と19世紀の身体における超国境的視点

Wartime Propaganda Tropes as Seen in Japanese Kamishibai (Paper Plays)

(Jeffrey DYM, California State University, United States)

紙芝居に見る戦争プロパガンダ

Microscopes and Moxibustion: Medical Hybridization in Wartime Chongqing, 1938-1945.

(Nicole BARNES, University of California, Irvine, United States)

顕微鏡と灸療法：戦時重慶の医療的ハイブリダイゼーション（1938-1945）

多くのセッションのなかで、関西大学の陶徳民先生が率いる研究チームによるパネルセッションは非常に印象深かった。このセッションには、若手の研究者四人が複数のテーマでそれぞれ発表し、その後総合的なパネルディスカッションを行った。筆者がとくに興味深いと感じたのは、Chi-Sung Chen の発表である。彼は、西洋諸国の出版物を史料として用い、その中にあった近代中国における裁判や処刑に関する報道記事に注目している。そこで、中国の伝統的な処刑方式について、外国人はどのように理解／誤解したのか、またはそれによって外国人の中国人／中国社会に対するイメージがどのように形成されたのかなどについて研究されている。テーマの斬新さだけでなく、豊富な史料を存分に活用し、細部までに巧みな分析を行った説得力のある発表だったと感心している。四人はフロアからの質問やコメントに対しても丁寧に対応し、活発な議論があった。

「世界史」というものは、歴史教育或いは歴史研究の領域において、比較的新しいカテゴリであるため、世界史学会の年次大会においてもその発展に関する議論が行われた。いわば、世界各国の研究者や歴史学科教員の交流の場である。世界史学会は1982年の設立以降、長年にわたり「世界史」という歴史学の分野の育成に力を入れ続けてきた。アメリカ国内において、現在多くの中学校や高校で開講されている「世界史上級課程（Advanced Placement World History）」というのは、主に世界史学会の会員が開発し、現場で実施することによって、徐々に定着してきたものである。一方、中国国内においても近年、「世界史学科建設」、すなわち、「世界史」を既存の歴史研究や教育と一線を画した歴史学科として確立しようとする流れが見られる。今回の大会の主催者である首都師範大学「全球史研究中心」も近年に設立された研究機関であり、その流れの一端だと思われる。今回の大会では、「世界史研究」や「世界史教育」に関して集中的に議論する円卓会議がいくつも設けられた。たとえば、「中学校での世界史教育」、「20世紀世界の中の中国史教育における私的資料の使用」、「世界史教育における年表の教え方」などが挙げられる。以下、「世界史研究」や「世界史教育」に関する個別発表をいくつかを挙げてみよう。

Seeing from the Outside: China in American University World History Textbooks.

(Jiayan ZHANG, Kennesaw State University, United States)

外側からの視点：アメリカの大学世界史教科書の中の中国

Teaching Family History as World History from the Perspective of a Chinese Graduate Student in the Field of Chinese History.

(Fang QIN, University of Minnesota, United States)

世界史としての家族史：中国史専攻大学院生の視点から

World History: Teaching and Research in the Asian Area.

(Shingo MINAMIZUKA, Hosei University, Japan)

アジア地域における世界史教育と研究

Teaching World History in Middle East Universities: Challenges and Prospects.

(Ahmed ABUSHOUK, International Islamic University, Malaysia)

中東の大学における世界史教育：その挑戦と見通し

New Approaches to Teaching China in Freshman World History Surveys.

(Irina MUKHINA, Assumption College, United States)

大学新入生の世界史調査における中国学習の新しいアプローチ

世界史学会の2011年大会は首都師範大学で五日間にわたり開催されたが、その後、一部の大会参加者は西安と敦煌へ足を延ばした。筆者は参加できなかったが、最新版の『世界史学会会報』(WHA Bulletin)を読む限り、参加者たちはかなり多くの古跡や歴史的人物の旧居などを見物したようである。

III 結びに代えて—若干の感想

最後に、今回の年次大会に参加して得た感想を述べておきたい。昨年のサンディエゴ大会と比べると、まず参加者数が多いというのが大きな特徴である。昨年の参加者数は約200人と聞いているが、アメリカ国内での開催ということもあり、アメリカ国内の研究者が中心だった。今回は、中国国内からの参加者だけで約200人に上るほかに、日本、韓国、カナダ、シンガポール、ドイツ、マレーシア、オランダ、エジプト、ロシア、台湾、イタリア、イスラエル、スイス、グルジア、オーストラリア、香港、ベトナム、スペイン、トルコ、ベルギー、ブラジル、英国などの国や地域からの研究者が参加した。後でわかったことだが、中国国内からの参加申込者は予想よりもはるかに多かったため、選考には非常に時間がかかったらしい。中国以外の国や地域からの申し込み及び選考は順調に行われた。

しかし、やはり参加者数が膨大であるため、発表セッションは非常に多く設けられていた。実際に発表を聴講することになると、いくつか聴講したいセッションが同じ時間帯に進行されていたため、選択を迫られることが多かった。また、一つのセッションに四つぐらいの発表が設定されていることもあり、じっくり議論できる時間が少なかった。昨年の大会では、もう少しゆったりしたスケジュールが組まれたため（一つのセッションに二つの発表しかないケースもあった）、質疑応答に十分な時間が取れたと感じている。

次に、「世界史の中の中国」を大会テーマの一つとして設定したこともあり、中国に関する発表が半数以上を占めたことはもう一つの特徴である。昨年の大会でも、中国に関する発表はかなり多かった。基調講演の一つも、San Diego State University の中国史研究者である Kate Edgerton-Tarpley 先生による清末に関する発表だった。昨年と今年の二回の大会期間での交流を通して、筆者が個人的にもっとも印象深く感じているのは、中国史研究に対する世界各国の研究者の熱情である。中国に地理的に近い日本では、中国史研究の伝統があり、かなり盛んに行われていることに驚きはない。しかし、アジア以外の地域において、これほど中国史研究が注目されていることは予想以上であった。同時に、一つの共通の問題意識が諸国の研究者のなかにあるように見える。すなわち、これからの中国研究は、中国だけに目を向けた研究はほぼ不可能となり、グローバル化な視点で行う動きが主流になるのではないかとと思われるのである。そして、一つつけ加えれば、昨年と今年の二回の大会において、多くの研究発表を聴講してみると、意外に日本でよく見かけるような「小さい研究（細部から着手する研究、或いは問題設定の小さい研究）」が多く見られた。グローバル化という大きな視点をもつ世界史学会の年次大会だが、地域研究という従来の研究手法の有効性が依然示されている。

（よう　とう・名古屋大学）